

事務局津田尚美

編纂 岸本桂子

私の中国旅行記

門
更

の
逐次刊行物

昭 57.12.15 和

國立婦人教育會館
情報圖書室

前回の女性問題に引き続き、今回は「平和」ということに焦点をあててみたいと思う。私たちが中国を訪れた時、折しも日教科学問題が激化して、日中兩國間には火花が飛び散っていた。出発前、中国本土での冷遇を予想して少し不安に思ったが、実際、中国の人々と接するとそんな心配はどこかに吹きとんでしまった。訪問都市の各がイドさんやホテルの服務員の人たちは、みんな親切だったし、観光地や街で出会った人々は「你好」と声をかけると、みんな笑顔で挨拶してくれた。我々と同じホテルには欧米人観光客も泊まっていた。エレベーターやレストランでは欧米人に対するコンプレックスはない。むしろだが、やはりどうしても「異和感」を感じてしまう。彼らが「ルンペン」族のいかめしい顔の造作や大柄な体格やすべりなジェスチャーに對してとっつきにくい「異和感」をもってしまうのは私ばかりではない。

した。その反面、同じ蒙古人種に属する
 中国人に対しては、初対面から抵抗なく
 接する事ができた。彼らの取すかしらう
 は表情や細かいしぐさで、私が幼ない頃か
 ら見てきている日本人のそれと似ているか
 うだろう。このような親しみの感情は、人
 種や民族といった人間の本質に根ざして
 おり、思想や国家体制を越えて存在する
 のではないだろうか。中国人ばかりでなく
 南北朝鮮や他のアジア諸国の人々に対
 しても、いわば「血族」としての同胞意
 識を本来は持つべきなのである。
 明治維新以来、日本のお手本は、欧米諸
 国であり、そのガーループの一員になること
 が、目標であった。欧米列強がその近代
 工業力・軍事力によってアジア諸国を侵略
 していった時、日本もそれに追随した。
 約二十年前から中国を中心とした東ア
 ジア世界の小さな一員として存在してき
 た日本が、アジアの世界を抜け出し、ヨー
 ロッパの世界に仲間入りしようとした。こ
 の事がアジア諸国を蔑視し、侵略し、支配
 するという戦前の「大東亜共栄圏」の我
 想に結びつき、戦争の大義名分になっ
 たのである。
 一方、日本がこれほどありあけに同
 化したと願った欧米諸国の日本に対す
 る感情は、どうなのだろうか。一時、フ
 ームになった「エコーミッド・アナル
 ヤ」に、サギ小屋に住む働きバケ

が象徴するやうに、欧米人の日本人に対する無知と偏見は、国際化社会の発展にもかかわらずなくはない。結局、日本の一方的な片思いにすぎない。結句、私の独断と偏見かもしれないが、例えば、米ソ両国も元々ただせば、ゲルマン民族の国家である。今は骨肉の争いを続けているが、いつかある時、手を取り合つて、東洋の黄色いサルという国を攻撃するかも知れない。この精確な心算にはある。現在の世界ではまだ民族の枠が強大だ。民族の争い、いかに残酷で、執念深いかは現在の「パレスチナ紛争」が証明しているではないか。

「遠く」の親戚より近くの他人」という諺があるが、中国や南北朝鮮などの東アジア諸国は、まさしく「近くの親戚」なのである。お隣りの国として同じ血族の一員として大事にするべき仲間なのである。だからといって決して欧米諸国との友好を否定しているのではない。現在の日本があまりにも「西側諸国の一員」としての立場に固執することには危惧を覚えるのである。距離が近い国との間にはたぐさんの問題がひかえている。領土、貿易、経済協力、文化交流、西側防衛に加担する前に、日本がやらなければならぬ事はたくさんあるはずだ。

このたびの中国旅行で、握手をした少年や、道を教えてくれたおばあさんや、写真に写った子どもたち、あのひとたちと二度と憎しみ合ったり殺し合ったりしてはいけな。4年前に日本で行った行為を「侵略」ということばで表す。

現存することこそが、戦争責任国の反省であり、償いである。その態度を失った中国や南北朝鮮などアジア諸国との友好は継続不可能だろう。お隣りであるがやえに、日本帝国主義の犠牲となった中国や南北朝鮮の人々、彼らは今だにそれを忘れてはいない。外国人観光客のガイドを勤める中国人は、ほとんども前年の戦争を知らない世代であった。理由を聞くと、やはり40代以上の方には、日本に對して良い感情を持っていない人が多いとのこと。被害者が忘れたいいううちに加害者が忘れたいというのは許されぬ。

最後に教科書問題に就いて私たちに呼びかけた北京のガイドさんのことを紹介しよう。日本の戦争責任は日本の人民全体にあるのではなく、一部の政治家と軍国主義者にある。戦争によって苦しめられたのは、日本人も同じである。今回の教科書問題も日本の軍国主義を企む一部の勢力が日本の政府や文部省に働きかけて企図したものである。だから私たち中国人は、日本人民と手を携えて、一部軍国主義者の台頭を阻止しなければならぬ。あなたの方の協力を期待します。

私はこのことを聞いて、右傾化を歩む日本を止めようと思ひ、また止めることのできないうちに日本を恥ずかしく思った。と同時に、一國の責任を国民全体に押しつけることなく、國家の枠を越えて、人民同志が團結して平和や幸福を追求するという思想に深く

い共感を覚えた。

★日本人の引き揚げ体験の多くは、被害者意識で書かれており、なぜ命から逃げてなければならぬ避難行があったのか、難民生活がもたらしたのが、又中国の残留孤児の問題が、今だに重い現実として横たわっているのか、その原点をたどっていくには、日本がよその國を侵略し、支配したことの結果であり、東南アジアでのからやさんとの存在、個々の日本人のつらい戦争体験と共に、私たち日本人は、侵略し、支配した側になたということを忘れてはならない。満州を故郷として愛してやまない、澤地久枝さんの本、どうぞ読んでみて下さい。 (岸本)

おとなになる旅

ポプラ社 九八〇円

もうひとつの満州 文芸春秋 一〇〇〇円

★近くの富良野国道を自衛隊のトラック、オートバイ、戦車なども、毎日往來するのを目撃するにつけて、時代の流れに對する私たちのひとひとりの責任を痛感します。何から始めてよいのやら……

全道母と女教師のつとめ 記念講演のテープを起してパフレットにしたものを、磯野純子さんより送って下さい。ご希望の方は

岸本まで連絡下さい。

「原爆の図」は私の遺言です

丸木俊 (画家)

一九八二、七、二六 旭川市市民文化会館

★9月11日(土)、「ながさき婦人問題会議」で「女の生き方」と題して基調講演をされた室加代子(フリージャーナリスト)さんが、後日集った婦人対策室宛に「長崎で自分と考える同じくする女性たちに出会えてうれしかった」と著書二冊を託されました。

当日、司会を担当した葛西よう子さんが、本のお礼と共に「女の103年」のB.W.の会報を送ったところ、折り返し、彼せより、

「女の103年」ありがとうございました。あの日、会場の前の方の席で、よく反応してくださるお姿、壇上から目について、ああ、なつかしく、つつがなくやれよう、と勇気づけられたものでした。今日は、また、すてきなノートをありがとうございました。やりますね、長崎の女性たちは……婦人問題については確かに地方の時代、ようです……と返事がきました。

▽リブ・ラブ・ライフ 出版 九分冊
小室加代子評論集

▽アメリカの旗

事務局にあります。

★男らしい死とは？

津田尚美

先日、ヘンリー・フォードが重体の時、「威厳を保つたまま死なせてやりたい」というのが、苦痛に充ちた一家の結論であるとして、生命維持装置を使わず、自然な形で本人を永眠させることに決めた。息子のピーター・フォードの談話が朝日新聞に載った。その見出しが「フォードに男らしい死を」となっていたが、どこを探してもピーターは「男らしく」とは書いていない。又、娘のジーンが「男らしく」とは書いていない。男らしい死に方というのだろうか。新聞記者が男だから何やらすばらしい気持ちは、全て「男らしい」といいながら、おぼろげに何やらすばらしい気持ちは、全て「女らしい」というにしよう。ところで女らしいすばらしい死に方とは？

★言葉も変わる？

花房知子

つい先日のこと、近くの公園に写生にきていた数人の中学生達のことは……

「ふぐけんじゃねえよ」

「バカヤロー」

「うるせえな」

「おいめしくおうや」

男子生徒ではなく、女子生徒の言葉である。「この頃の若者の言葉は乱れている」という嘆きは、よく耳にするところだが、実際に女の子たちが、盛んにのり言葉や男言葉を使っている。大人たちの男女の価値観が、変り、女は女らしくという時代ではなく、つて、その影響が子ども達にも及んでいるのだろうか。女も男といふように勉強し、仕事をし、服装もヘアースタイルも男女の区別がなくなってくると、中性化するものは自然なのか。早くも早いこの世の中、子どもの動作も激しくなると男言葉の方が、便利なのか、それとも単なるつぼりなのか、いづれにしろ、女の子が男の子と同じ言葉を使い始めたというこの現象をおぼたはどう考えますか。